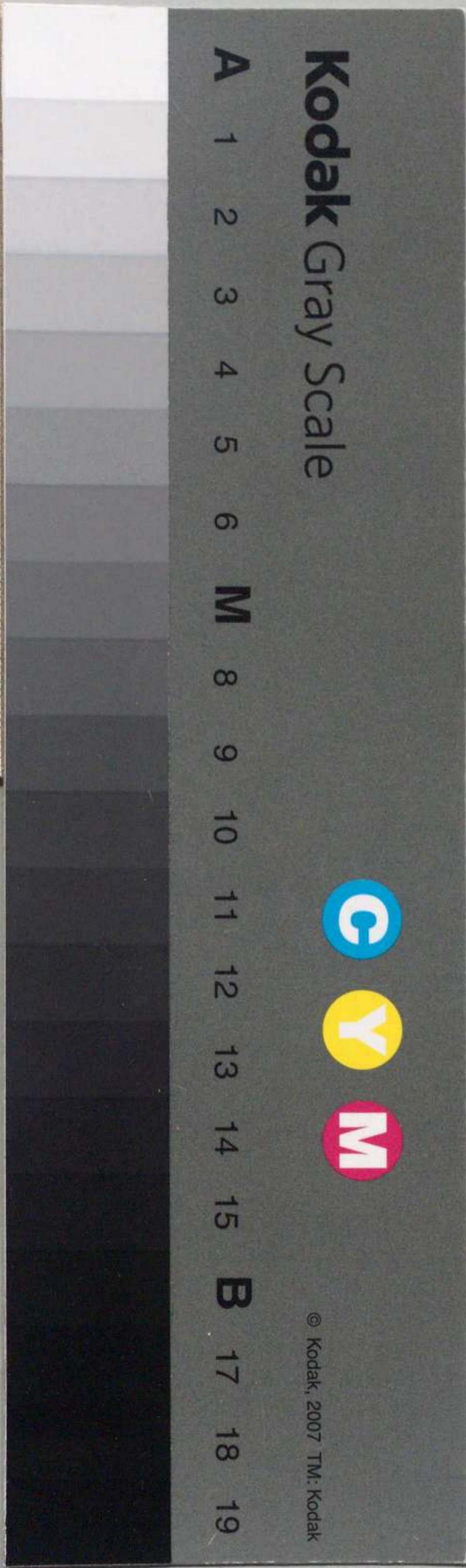


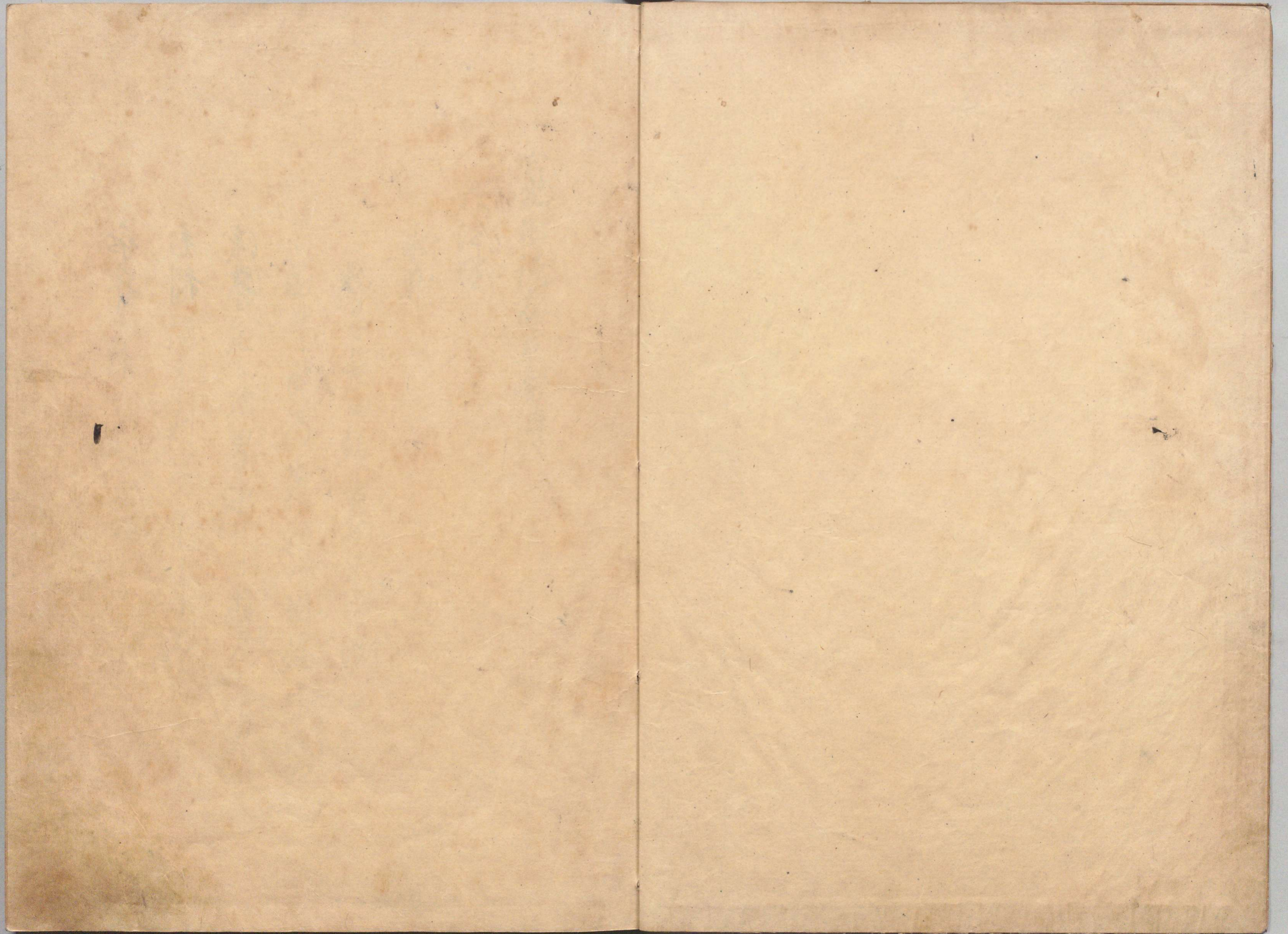
寛永諸家譜

大江氏  
四卷之内

146

|      |           |
|------|-----------|
| 内閣文庫 |           |
| 番號   | 和 20199   |
| 冊數   | 186 (144) |
| 函號   | 特 76 1    |





永井  
毛利  
浅井

寛永法華系書傳

大江姓

永井

勅<sup>つとめ</sup>長田<sup>おさな</sup>後永井<sup>のち</sup>より改<sup>あらた</sup>む

永井<sup>えいせい</sup>氏乃<sup>の</sup>先<sup>せん</sup>祖<sup>そ</sup>八田<sup>やちだ</sup>備<sup>び</sup>守<sup>し</sup>大江<sup>おほえ</sup>

廣<sup>ひろ</sup>えが次<sup>つぎ</sup>男<sup>おとこ</sup>永井<sup>のち</sup>時<sup>とき</sup>廣<sup>ひろ</sup>う流<sup>なが</sup>なり

家<sup>いへ</sup>譜<sup>ふ</sup>毛利<sup>まうり</sup>の卜<sup>うら</sup>りみえうり

故<sup>ゆかり</sup>りしを<sup>を</sup>取<sup>と</sup>り

浅草文庫

廣正

長回表八郎

生國之河大演

廣忠彌子侍之忠誠を侍とせ故に

大控現今川義元より速く大演上は

宮祿田とありて一じ義元此禮文に

まゝありて書ありい

松平竹重初川大演上と交祿回

右先年尾列長崎死相刻

對廣忠と云沙汰之桑枝祿田

故信為忠節より去年書

之と然志勳相當に神役可支配

や若先祿宜隆金所松一切不

可許害者や

天文十九

十一月十九日

治部右衛門 義元

長回表八郎也

元元

長田平太夫 生國同好

天正十年六月信長生家乃時

東照大権現和泉の場より舟より乗付

尾張と経く大演り清下若乃時

元元舟と修く清定りお

大権現清感ありく元元館一入清

あり元元清膳を献じ修奉此

人より七飲食也

直勝

長田傳八郎 恆永井右近大夫と号と

生國同好

之列長崎よりとひく 信康より

清くくくあか 信康自遊吉此

後寺列演松よりとひく

大権現より清くくくあか 信よ

長田の義朝を討つ所遂に其氏を  
長田と改めしため永井氏を  
とあり是よりわく平村と改め  
大河と改め  
家傳よりいらく長田入るが先親政義朝  
と執つた事よあつてさゆ故り  
親政が在商流お給く長田と称し直勝  
をこころにあり

天正十二年

大指現尾列り一渡津より小牧より  
陣よりあり

日月あり長久の合戦より直勝  
池田勝入毒勝花とお戦ひけ内直勝  
をりつて勝入を突傷し一命其首  
をとつりしりて敵軍敗れし

大指現大子清盛より勝入あり  
篠雪より力と直勝よりたつり

時一廿二歳

大捨現園東沛入園乃時能比五千石と  
し海らる

大捨現秀吉と相議し給ひしと  
在長五倍下りし給ひしと大妻し

何ぢしめは豊臣乃姓とす  
享長五年開ヶ系沛陣乃と此地

此とが系沛海陣の後に列せし  
領地二千石とくし

同六年正月十五日与力以ん

おつれられし侍禄として  
十石乃地とし海らる

大坂も度沛陣より信を沛海陣の  
後諸軍総中れ忠否と穿致せ

らるしといし直勝総中  
義ししと直勝次中

きしとの信をうらる

大捨現園東沛の長元和三年

台徳院殿乃御命とけし

此城主となり之万二千石と領す  
同五年福清在東の大支國國の時き  
上使としく下向し安藝備後  
乃ち城を請ふ

同年梯の甚く浦しりく二百石と  
く移りすく二百二千石と領す  
同八年上原忠房國國の時上使  
少して上よりしりく山の城  
を請ふ島居左衛門右衛門の城と

為領す家よりしりく是よりす

しりく

同年笠間を改む右河守の家  
計時二百石とくく移りすく  
七百二千石と領す

寛永二年十二月廿九日歳六十三

しりく率を 道号月丹







しーてらめく

白徳院教りしに人さるる大久保

相模守忠隣を表者とも

交々長十九年元和元年大坂あ

度の沖陣り水野監物よ属し

く侍を

同年十一月

白徳院教りしに地をさるる

同五年直勝上使少く安藤守

廣嶋ひろしまりしに時直清ときなかつらも又  
始はじりしに又二回移く

寛永三年又領地をさるる

直勝遠近の内なり

同九年四月七日

將軍家の命りしに清書院しよんごんを

とけしむ

同年領地をくくを御ふ

同多十一月十八日從五位下り

新日向寺しんじやうに任じ

同十年山城守長尾勝龍寺やましろのちかひなりに任じ

をひく地を賜たまふに

二百石を給ふ

貞貞あやふ

十三年長尾忠信よしかねに任じ

其前寺そのまへに任じ

將軍家清証えいしやう生七なな秋の中あきあり

清之寺しやうのに任じ

貞貞あやふ

長八郎 生玉武藏

長尾忠信やしろに任じ 式部しきぶに任じ

其前そのまへに任じ

元和四年げんわに任じ

貞徳院てんとくに任じ

尚征 あきゆき

大膳<sup>おほのざん</sup>右進<sup>みぎしん</sup>奈生<sup>なせい</sup>園<sup>のぞ</sup>田<sup>の</sup>前<sup>まへ</sup>

元和八年

あし<sup>あし</sup>取<sup>と</sup>り<sup>り</sup>湯<sup>ゆ</sup> あし

九歳

寛永六年 あき

右<sup>みぎ</sup>進<sup>しん</sup>院<sup>いん</sup>敷<sup>しき</sup> あき

同八年 あき

し あき

尚保 あきやす

右<sup>みぎ</sup>進<sup>しん</sup>院<sup>いん</sup>敷<sup>しき</sup> あき

寛永七年 あき

あし<sup>あし</sup>取<sup>と</sup>り<sup>り</sup>湯<sup>ゆ</sup> あし

時 あき

同八年 あき

右<sup>みぎ</sup>進<sup>しん</sup>院<sup>いん</sup>敷<sup>しき</sup> あき





左を大吏切おな系移へ新糸此  
島垣少人いと海とつては時  
白元浪人となりて之別り  
孫と

同三年一より

大持現一に之つては

同四年秀次謀叛の時

大持現江戸より駿馬一頭を金取口

つて馳たふ時白元と島垣少

二人沖腰物を持ちこつて伏見に別  
去山より白元一人沖つたを  
島垣一と伏見一と

秀次長元年朝鮮の遊撃將軍来

朝一と大坂の城一と

一と湯見一と四使及朝鮮使は飲食

をそ給ふる乃ち時と海と

一と

大持現か賀れ利家自一と



まゝをり大坂の城より  
馬者此伯今頼植此時  
開東より山神此具  
伏見より美濃あり  
け時信も乃人うあさ  
む白元是於小次郎  
人皆強健と感と

同年

大指現お列り  
此地を考す

同二年十二月

白濱院殿  
お高攻地  
あり

大指現伏見  
修之修奈本  
安否と

うしじ時は白元河りり 伊奈本よ  
見ざる  
参るるしし

白徳院致しし福しききつる大久保  
相控ちしし修くし海をぬり且其服  
を存候も又甲りり伏見よ修き

赤病留の恙なきししと云ふこと  
大控現大りし沖感あり白元が性来

のなき事を感じし修くし  
大控現忠河越しし沖捕控るる還治

乃時志村れ者しり駿馬りめ河れ遠足  
り馳せ候しけ時人らあふひを候  
幸あしし白元獨信者しし

大控ししし修くし相者もくし  
大控現の早馬しきし優者し決せん

と云ふ  
大控現の修りしし白元相者候し

取のしし脇指ししし追放

同丑多九月十九日開ヶ京赤陣よ

信守聖旨江列佐和山城をせ免  
こみ共士遊鳥の民家着千り  
火と致白元こ戸田又久とをり  
是とあづめし時よ城中は落  
今りあひ又久と人とし捕  
白元と人とし捕  
大控現し執し  
同七年  
白徳院殿ししはくし

同九年

白徳院殿海道の一里塚と居しむ時よ  
白元と多作と中仙道と居し  
めくし又居ししはくし  
堀北成吾とありためみし  
同十二年沸使番となつ家

同十四年

白徳院殿し下総ししはくし二百石  
とくし

同十五多同五よりよひく二百石と  
くくくく

同十六年御目付となす

元和二多下総よよひく二百石と加ふる

同八年同國よりよひく二百石と

加増

同九年同國よよひく二百石と

寛永二年十月より恒五倍下

新 監物より倍

同五年下総よりよひく二百石と加増  
よりよりよひく二百石と倍

元元

本之助 永在妻の 中園武蔵江戸

享長十六年二月

旨徳院教をよむ

將軍家より賜へりし時より十一歳

元和二年より

白鹿院殿より信之へ書す

正元

右葉 生國同前

寛永六年

白鹿院殿より

將軍家より信之へ書す

同十二年より

將軍家より信之へ書す

正元

本之助 生國武藏江戸

寛永十七年

將軍家より信之へ書す

同十八年より信之へ書す

元勝

白鹿院殿より信之へ書す

實ハ保ほノ石見守貞廣まことひろノ子ナリ

寛永かんえい十六年九月

白根院しらねいん敏とみノ

將軍しやうぐん家いへノ錫見あつみノ

同どう十五年ごじゅうごねんノ津安つやすノ

家いへノ級かぎ一文字いちもんじノ



某

禁六島 生玉田あり

台徳院殿よりつゝさきまの武列

小塚系と銘を以て戸なりと云ふ病犯

少く七十一之 法名湖月浄珊

重勝 重勝

六葉 生玉田あり

將軍家より法之つゝさきま

寛永十一年二月廿七日 江戸府

とひく病死歳五十七 法名林屋浄貞

重政 重政

六葉 生國武苑

寛永十六年正月より

將軍家より法之つゝさきま



家の紋丸内遠之野羽

ちびんたらのえ

永升ながの

吉次きちじ

吉次郎 生國之河吉良

大樽現おほづゑんりり流ながくくままつり之列吉良

繩なは子合あひ戦せんりりままひく戦せん切きりあり

吉列きちり高たか天神合あひ戦せん乃のときときひくふ

城中ちゆうじゆうりりりり歌うたののきり物ものととぬく

つりり乃ちまゝ先也と  
後列田中合戦よりまひく厚り也

あらと

長久自合戦よりまゝ名あ

文禄元年五月廿七日甲午、又業

病死 法名西光

忠正

と次郎 生玉幸江

九歳より

台徳院殿より一泊くまらふ家

寛永元年より

將軍家よりつとくまらふ上白

の地と候と

吉勝

勅九郎 中園田家

文禄二年兄忠正と同一



將軍家より信之へさくまらり大出着

と信之

同年津上洛より信之

寛永九年十月 信之がうら

津奥方々書取とあり加増百石と

し

正勝

之十郎 生國武為

寛永七年より

將軍家より信之へさくまらり

勝忠

牛の物 生國同なり

寛永十六年より

將軍家より信之へさくまらり

家乃級一文字の下之星

毛利まうり

● 改次かいかい

十島じゅうとう在事ざいじの尉ゑい 牛うし園えん尾お法はふ前ぜん安あ加か  
信のぶ長ながよりより法はふ久く

了次りょうさい

九く高こう印いん在事ざいじの尉ゑい 牛うし五ご回かい安あ

秀吉一いつふ

文長二年二月方七十一歳小

く死す 法名之水

秀吉

勘八郎 民部大輔 伴瑞を以て結

生國田お 本氏ハ森あり

秀吉一いつふ

天正十年 秀吉森輝元と備中國

秀吉一いつふ 六月方一

明智信長とらうらう家あり家り

とひく秀吉和儀ととく 京都よ

のびんとと時 輝元とわん

人賀と 秀吉と改と輝元

人賀とと 輝元

秀吉一いつふ 改と氏とわ

氏と改と 改と

秀吉と改と 命とと毒と改め



毛利やなまうて又家此級勢丸  
たり秀吉朝鮮國と征せんがため  
お陣乃時之政一命ごとくいへば  
母方此氏梶原たまたは夫若とも月  
く級となまうて一となり是り  
うりて夫若と送級とも

同十一年四月廿七日江別志津嶽  
とひて秀吉柴田勝家と合戦乃  
時之政送とあらせ疵をうり

同十一年三月十日ありて豊後國  
隈乃城と申海より二万石と領と  
文禄四年秀吉まゝ朝鮮と征と  
ときこの政目付となり水江り  
とひて番船と申と海軍京城と攻め  
とき戦切ありふりて秀吉感懐と  
たすふ今よ星と示物とあり乃ち

東照大將現りりつりて  
文長六年四月あり

大権現乃命と受け渡の城とありたぬ  
日國佐伯城を頼朝一又日田玖珠  
あ那の那代と物言けらる

同十九年乃冬大坂陣陣乃とき  
信守一と備前備前橋本を急を

せぬんりこむ

翌年の夏津陣一は四月廿日  
右後國佐伯の城をお船一四月  
ちりり大坂一つぎ

大権現をこむ

右徳院教一湯一おとくもる

寛永五年十一月十六日七十歳

く率一と法名紹元

長安

右高師おまの生國尾法

幼おらり秀吉一り流一人乃ち

大権現一湯一おとくもる

白法院殿より

將軍家よりつとくさくさる家

寛永十七年正月朔日六十一筆小

しと死を 法名宗文

吉成

勘業 生國之河赤坂

寛永十二年より

將軍家よりつとくさくさる家

吉成

勘業 寛永十四年海防郡佐伯より

將軍家よりつとくさくさる家

吉成

勘八郎 播津寺 生國を授

母は本弟伴福寺が女

寛永十八年五月廿七

大権現をこし

白徳院教りし物揚り

同年七月十九日十一歳より恒也伝下

りし物揚りし物揚りし物揚り

寛永九年十一月七日肥後國熊本

乃城よりをひくをひくをひく

歳よりく率より法名室繁

こし

次郎八教馬 生國同あ

之直

市之郎 生國氏孫

母之依久月備あさぐ女

寛永十年二月より

將軍家乃御命よりけ之歳より

職よりひし

家乃級えん乃の級の乃の凡や夫ら者らとらしとくは級ととと





寛永十六年よりつとてつとつり  
く大津藩とつとつ

月十七年より死る歳四十七

重長 ちかなが

平之助 生國大和 やまと

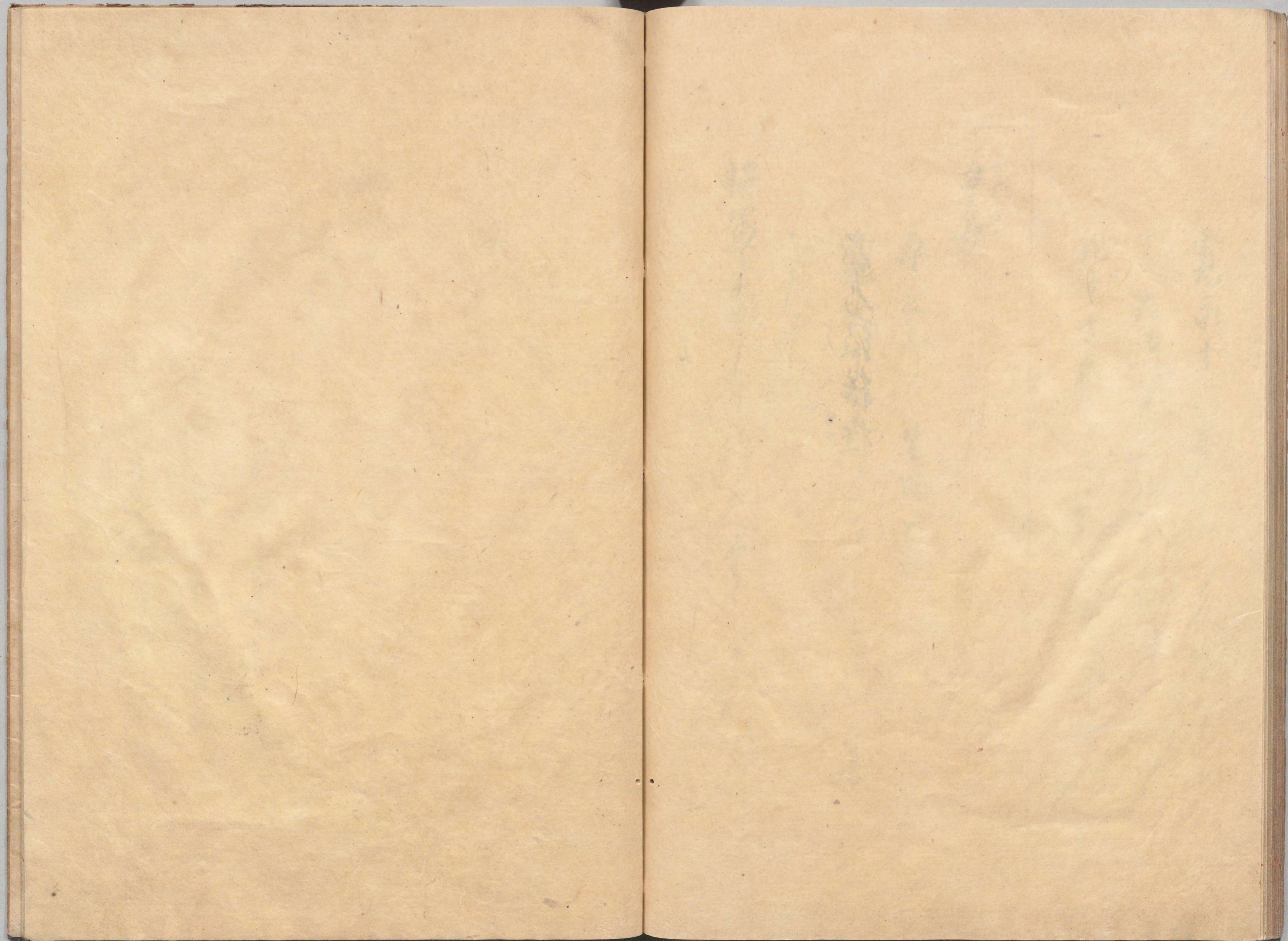
寛永十七年父死しつとて後任職 のちあてしむ

とたつり

將軍ありつとつとつとつとつ

家乃紋格様 いへのみぶし





浪井 あぶら

● 勝政 ちかまさ

備前守 ひぜんのみ

く 免 後 京 極 氏 一 属 一 後 一  
京 極 一 不 和 此 事 有 一 一 合 裁 一  
大 一 勝 江 列 小 首 塚 一 一 京 極 一  
和 勝 一 一 世 一 増 相 一 一 一 一

祐政 まげ

下町書 しもまちのうり

東の東物之妻が女 あづまのあづまものつまがむすめ

長政 なが

佐あ守 さあもり

信長れ妹より嫁を好ふ信長と横を  
あしうひ敷き合致し小首城よ  
とひく死を後井けらびくね

東極も又海浪も

某 なにか

新八郎

某 なにか

新八郎 恒信流と号し尾張れ介なり  
信長より了

某

田家 母は毛刺新屋のじすあはふ  
前安部と号す

改定

新大郎 母は新屋國田家  
九歳より大和中納言  
十二歳に時あり

大持現を

白徳院殿より侍りし  
佛陣より侍りし  
大坂あ度の佛陣より侍りし

改修

長者は子甚多と号す  
九歳より  
白徳院殿より

將軍家

政別 まさり

牛 うし

生 なま

家 いえ

乃 の

級 きゅう

相 あい

兼 けん

